住宅建築賞2018
入賞作品展
2018年
6月20日（水）－7月6日（金）

入賞レセプション／オープニングパーティー

申込先着順　定員:80名	入場無料

6月20日（水）

▌入賞レセプション
16:30～18:20／AGC Studio（2階）

▌オープニングパーティー
18:30～20:00／AGC Studio（2階）

※入賞レセプションは審査員による入賞作品講評、
および入賞者とのディスカッションになります。

▌住宅建築賞 審査員
審査員長：乾 久美子
審 査 員：青木 淳／金野千恵／平田晃久

▌主催
一般社団法人 東京建築士会

▌企画
東京建築士会 事業委員会

▌後援予定
公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
株式会社 エクスナレッジ

▌協賛
ファーバーカステル
株式会社 建築資料研究社 日建学院
株式会社 総合資格

▌協力
AGC旭硝子
工学院大学 木下庸子研究室

▌申し込みお問合せ先
一般社団法人 東京建築士会
東京都中央区晴海 1-8-12オフィスタワーZ棟 4F
tel.03-3536-7711 fax.03-3536-7712
e-mail.jks@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp

AGC Studio

〒104-0031 東京都中央区京橋2-5-18 京橋創生館1・2階
tel.03-5524-5511　www.agcstudio.jp

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE
住宅建築賞入賞作品展

住宅建築賞2018
入賞作品展

2018.
6.20 wed - 7.6 fri

［日曜・月曜休館］
10:00～18:00 入場無料
AGC Studio（2階）

住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞
▌寶神尚史 + 太田温子

住宅建築賞
▌河内一泰　▌加藤大作 + 清水純一
▌藤原徹平

住宅建築賞 奨励賞
▌渡邊大志

一般社団法人
東京建築士会
TOKYO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

住宅建築賞 入賞作品　2018年 ｜ 一般社団法人 東京建築士会

応募主旨

審査員長　乾 久美子

【希望のある住宅】

去年に引き続き、テーマは「希望のある住宅」とします。
住宅は、住まい手が、環境を選びとり、建て、住まうといった一連の行為の総体として現れるものだと思います。それは生きることと同義となるぐらい迫力のあるものだと思います。また、建てることとは希望をつかみとるような行為なのかと思います。
しかし、近代を経て、建てることが産業の世界へと取り込まれてからというものの、建てることと生きることのつながりは薄くなり、建てることの多くは、車やテレビなどの消費財を選ぶこととあまり変わらなくなってしまったように思います。建売を買う、商品化住宅のメニューから選ぶというような行為によって、あまり苦労をせずに整えられた環境を得ることができるようになりましたが、そこで得られる環境は、地域や風土から切り離されたものにとどまるのかもしれません。同時に、住まうこと、その先にある生きることそのものは、根底から揺らいでいるような気がします。
東京建築士会の住宅建築賞の応募作品に確認したいのは、住宅が、施主が選びとった環境の中で、生きることや希望とセットになって建っているかどうかです。住宅を通して、生きることの迫力や厚み、ユニークさが、現代においてどのように達成されているのかを見たいと思っています。骨太な作品に出会えることを楽しみしています。

応募要項

(1) 上記の主旨にかなうもの
(2) 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする（大幅な増改築、公共の建築も含む）
(3) 原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
(4) 雑誌等に発表したものでもよい
(5) 建築物の所在地は原則として1都3県（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）とする
(6) 応募の点数は自由とする
(7) 審査員の関与した作品は応募できない

応募要件

応募資格
応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者
登録料 本会正会員：無料（申込時に入会した方を含む）
他道府県 建築士会 正会員：1点につき5,000円（作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください）

提出期限
2018年1月31日（水）（郵送の場合は、1月31日（水）の消印があり審査に間に合うよう到着したものは有効）

提出先
一般社団法人東京建築士会　住宅建築賞係
〒104-6204　中央区晴海1-8-12オフィスタワーZ棟4階
TEL 03-3536-7711

提出資料
申込書及び本会指定A2版台紙
※第一次審査を通過した場合、建築士免許コピー及び検査済証のコピー（確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章）の提出を求めることがある
図面及び完成写真数点（内・外観）、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨（300字以内）等をA2版台紙一面（本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない）におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。
申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。その場合、①件名を住宅建築賞申込希望、②氏名、③送付先、④連絡先、⑤会員番号等を明記のうえ、E-mailまたはFAXにてご請求ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払い了承の旨お書き添えください。
（ E-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp FAX:03-3536-7712 ）

審査員

審査員長　乾 久美子

審査員　青木 淳／金野千恵／平田晃久

審査

1 第1次審査（書類審査）に通過したものは原則として現地審査する。

2 入賞発表　2018年4月中旬
・審査結果については、応募者に直接通知する
・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金

1 入賞者（5点以内）に対し賞状（盾）及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。
住宅建築賞 70,000円　住宅建築賞金賞 150,000円

2 建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。

3 表彰式：本会定時総会の席上（6月上旬開催予定）

応募図面の取扱い

1 応募図面の公表及び出版の権利は主催者が保有する。

2 入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展（公開展示：6～7月開催）の予定がある。

3 入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰作候補作品として、推薦することがある。

4 応募作品は返却しない。

審査結果（2018年 住宅建築賞）

応募点数 60点　住宅建築賞 入賞4点（内金賞1点）、奨励賞1点

住宅建築賞 金賞	KITAYON（東京都）	■設計者：實神尚史＋太田温子（日吉坂事務所株式会社） ■建築主：日吉坂事務所株式会社　■施工者：株式会社青（建物構造：鉄骨造）
住宅建築賞（受付順）	床と天井（東京都）	■設計者：河内一泰（河内建築設計事務所）　■建築主：匿名希望 ■施工者：田工房（建物構造：木造）
住宅建築賞（受付順）	谷陰の光（千葉県）	■設計者：加藤大作＋清水純一（UND一級建築士事務所）　■建築主：匿名希望 ■施工者：仲野工務店（建物構造：木造）
住宅建築賞（受付順）	稲村の森の家（神奈川県）	■設計者：藤原徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ） ■建築主：百瀬龍輔　■施工者：島建設株式会社（建物構造：木造（SE構法））
住宅建築賞 奨励賞	酒井邸（東京都）	■設計者：渡邊大志（早稲田大学理工学術院建築学専攻／創造理工学部建築学科） ■建築主：酒井幸輝　■施工者：株式会社栄伸建設（建物構造：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造）

参考資料

1次審査結果　2018年2月8日（木）実施。応募作品60点より、1人7点～10点を投票（審査員4名）

【1次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号									
乾	6	9	20	33	37	42	43	47	51	—
青 木	5	9	24	25	32	40	41	50	55	56
金 野	8	9	20	30	31	43	51	60	—	—
平 田	8	18	21	30	41	43	47	—	—	—

1次投票結果　（計24点）

獲得票数	作品番号	合計
3 票	9、43	2作品
2 票	8、20、30、41、47、51	6作品
1 票	5、6、18、21、24、25、31、32、33、37、40、42、50、55、56、60	16作品

1次投票24作品より議論し、2次投票を行った。

【2次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号				
乾	8	9	37	42	47
青 木	8	9	37	41	55
金 野	8	9	30	42	43
平 田	8	9	18	41	42

2次投票結果（下記10点より、議論）　（計10点）

獲得票数	作品番号	合計
4 票	8、9	2作品
3 票	42	1作品
2 票	37、41	2作品
1 票	18、30、43、47、55	5作品

下記5点を1次審査通過とし、
2次（現地）審査対象とした。
2次（現地）審査は、
3月19日（月）に実施した。

8　9　37　41　42

1次審査風景

作品講評

総 評

乾 久美子

去年に引き続きテーマを「希望のある住宅」とした。去年と思いは変わらず、住宅が生きることや人生とどうかかわるのか、そのようなことを考えさせられる骨太の作品に出会うことを期待しながら審査を行った。

今年の応募総数は60と去年から下がっている。これまでの応募数の履歴を観察すると、審査員が変わった年に応募数が伸び、その翌年は減るという顕著な傾向がみられる。竣工後3年以内であれば何度でも出せるとはいえ、同じ審査員であれば、2年目は出さないということがその数に現れているということなのだろう。なお、去年にもコメントしたが、現地審査は設計者と施主とのスケジュール調整が必須である。短い時間の中で調整いただけたことを感謝する次第である。

さて、審査は都内＞千葉県＞神奈川県＞都内という工程で進み最終的な審議は議論で行われた。途中、金賞候補の2作品をめぐって意見が分かれる場面もあったが、最終的には議論で決めることができた。

「床と天井」は木造家屋のリノベーションである。これまでいくつもリノベーションを手がけてきた設計者だけあってコスト管理や機能性の向上、さらにプロセスを含めた手法が確立しており、その中で適切なデザインコントロールがされていることに、全員で納得しながら見学させていただいた。「谷陰の光」は不定形敷地の形状にあわせてゆがんだ八角形の住宅である。鋭角の角地にあって、プライバシーを保ちつつ、穏やかな光を内部空間に導入することが試みられていた。「稲村の森の家」には二つの大きなテーマがあった。宅地開発された郊外住宅地の再生と、家開きである。敷地が一般的な宅地の区画を超えて裏山を含めたものとなっていることを利用して、のびやかな居住環境が展開しており、そのことが家開きのきっかけをつくっていることが印象的であった。「酒井邸」はスカッシュもできるという巨大な地下空間をもつ住宅である。仕上げやディテールにさまざまなこだわりのある住宅で、時代の流れから自在な価値観で建築空間を考えようとする姿勢に施主も満足している様子であった。ただし、設計者の構造に対する誤解が気になった。「KITAYON」は設計者みずから土地を取得し、事業計画から収支計画までを行いつつ、テナントビルを開発した作品であった。デザインの緻密さもさることながら、事業計画に関しても周到になされていることが印象的であった。また、今後も、界隈の土地を取得しつつ、まちづくり的な視点で継続的にテナントビルの開発を続けていくという。こうして不動産にまで業務範囲を広げる建築家は少なくはない。近年、30代～40代の建築家にみられる傾向であり、設計者はその中の一人ということになるだろう。ただ、具体の設計と事業のデザインとをなめらかにつないでいくような設計者の思考に、職能論以上にデザイン論の可能性を感じた。デザインの領域や意味を、かたち以外のところから拡張することに対する意識が明確に存在し、またテナントビルの敷地として狭小といえる面積の中、専有面積を削ってまで地域にひらくことのできる路地をつくるという判断に勇気を感じた。デザインというものが勇気とともにある、ということに改めて気づかせるものであった。

金賞を決める際、最後まで議論し続けたのは「稲村の森の家」と「KITAYON」である。どちらも現代的なテーマに立ち向かいつつ、そのテーマに対して高度な回答に至っており、さらに建築として魅力的であることは間違いないと一同で確認した。その中で最終的に「KITAYON」を金賞とすることに決定したのだが、「KITAYON」が今ある価値観とはちがうテナントのタイポロジーを構築しようとしていること、生業とくらしの新しい関係に建築的な回答を与えようとしたことなどに対して、建築家が大きく決断していることに全員で納得したことが大きかったといえるだろう。また、まちが更新されていくことや、新しいくらしの可能性を広げていることに対して、大きな「希望」の存在を感じたことが決め手となったといえる。

西沢委員長時代から4年間連続して審査をさせていただいた。「希望」などという、あいまいな言葉を選んで審査に臨んだが、新しい批評性のあり方を指し示すことはできただろうか。その成果はともかく、テーマに見合う作品は選定できたと感じている。2年間を通して金賞のみならず、批評性と施主のくらしとが高い次元で重なりあう素晴らしい住宅群に出会うことができた。

作品講評

2018年 住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞 | KITAYON | 設計者 | 寳神尚史＋太田温子（日吉坂事務所株式会社） | 講評者 | 金野 千恵

一定の地域においてその自然環境や文化、建物を理解し、それらが良好に維持されるよう手助けし、時には一層の魅力を備えるよう再構築する。こうした町医者のような建築家は全国でも数多く、近年では地方都市のみならず都市部でもこうしたモデルが増え、建築家の仕事の範囲が拡張されている。このKITAYONでは、建築家みずからが事業主となり、地域の理解に加え事業収支や将来的な経営戦略を立て、そこへ建築空間の可能性を投影することで、都市部における住環境の構築が試みられている。スムーズだったとは言い難い今年の審査会だが、僅差でこの作品、建築家が金賞を引き寄せた所以は、この事業構想から運営までのプロセスに一貫して緻密に取り組む姿勢にあったと言えるだろう。

都心近くにありながら、駅前が大きな資本に領有されることなく、住商一体と思われる理髪店、質屋、花屋、薬局、鍼灸院など、間口いっぱいの店舗ファサードが建ち並ぶ。KITAYONはこの商店街の終点近くに位置し、小さな敷地の間口を路地、店舗ファサード、屋外階段に三分割することで、連なる商店の構えのなかにスキを与えている。店舗のファサードをなすスチール建具は路地奥へと展開し、ポストが備わり外倒し窓が滑車式で動くなど、若干、趣味的な側面もありながら、つい触れたくなるような建築への愛着を生んでいる。二階店舗と三階住戸は、ボリュームの三方へ腰付きの開口部が回り、街に身を置く楽しみと軽やかさがある。しかしながら、これら建築的な特徴というよりもむしろ、枠組みの組立てから事業化、建築の構成、そのディテールへと至る都市住宅を掲げ、自らが街を変える原動力となって責任を持とうという建築家としての姿勢に、ある種の希望を見たように思う。不動産原理と建築空間の双方を緻密に検討し双方の強度を極限まで減じずにチューニングする。さらに、次なる面的な展開を準備し自らの移住をも計画する設計者は、一粒の都市住宅から都市を構想・実践する喜びに満ちており、その様子が何よりも刺激的であった。

住宅建築賞 **床と天井** 設計者 河内一泰（河内建築設計事務所） 講評者 **青木 淳**

既存木造民家の楽しいリノベーションである。2階建の木造家屋の外壁や骨組をほぼそのままに残し、内部の造作を一旦とっぱらう。その上で、2階の押入れの中板の高さと鴨居の高さを基準にして、建物全体を下から水平に、白く塗られた領域と塗られていない領域で層状に分節する。塗られた層が表の空間、塗られていない層が裏の空間、ということだろう。間取りは、ほぼ元のまま。ただし床の高さを様々に設定して、立体的に見合う空間が生まれている。設計密度は高く、完成度は高い。住宅として完璧と言っていい。

その上で、この人ならもっと先に行けるのではないだろうか、という期待も出た。あまりに上手に身丈にあわせて仕立てられているために、アソビがなくなってはいないか。下の駐車場と空間的につながったら、もっと楽しくなったのではないか、やはり図式が強すぎないか、などなど。無い物ねだり、かもしれない。でもこういう意見を、まだまだ先がありうる、という期待と受け取ってもらいたい。

住宅建築賞 **谷陰の光** 設計者 加藤大作＋清水純一（UND一級建築士事務所） 講評者 **金野 千恵**

ミニ開発によって酷似した構成やエレメントの住戸が群を成し、隣の街区にはまた異なる風合いの住宅群が現れる、これは郊外住宅地のごくありふれた光景である。谷陰の光は、そうした住宅群の台地から10メートルほど降りた谷地という立地のためか、多様な住宅の混じるエリアといえる。日陰に長時間包まれる条件のもと、三方向のハイサイドライトと吹抜けが組み合わさって光を取り込み、中央の柱を軸に居室となる三つの箱が重なることで、時間の変化が室内に満ちる仕掛けを創出している。箱と箱、箱と外皮が様々な奥行きをつくるとともに、居室から吹抜けを介した窓先への広がりは、身体と空を結ぶという開放的な体験を生んでいる。しかしながら、捨象の対象として扱われた崖地は、開口面の配置次第で都市をよりダイナミックに体験する環境として召喚される可能性があったのではないか。あるいは、木造架構を力の流れが想像しうる水準まで整理することで、箱と余白、すなわち図と地の双方が一層豊かな空間として立ち現れたのではないか、という可能性を巡らせたことは記しておきたい。

住宅建築賞 **稲村の森の家** 設計者 藤原徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ） 講評者 **平田 晃久**

作者は、あっけらかんとした感覚で、全てが建設途中のような、開かれた住居をつくりだした。それは、これまでの建築批評の枠組からの価値観のずれを孕み、評価の立脚点を問うような批評性を持つ。これまでみんながこだわってきた〈建築〉への志向から、こちらが不安になるほど解放されていると言えるかもしれない。もしかしたら唯一のこだわりー坂道の突き当たりに構想されていた切妻のボリュームーは、設計の過程で姿を消し、ガレージを改装して作った半地下のギャラリーに、しっぽのような痕跡をとどめるのみである。一体、このこだわりからの解放を、どのように見れば良いのか。

そこが微妙に評価が分かれたところだし、筆者もアンビバレントな心持ちだった。とはいえ、単に投げ出されただけに見える場の集積が、塩梅よく賑わう背後には、独特の「シャープな大らかさ」があることは確かだし、それ故に金賞を最後まで争うことになった。

住宅建築賞 奨励賞 **酒井邸** 設計者 渡邊大志（早稲田大学理工学術院建築学専攻／創造理工学部建築学科） 講評者 **乾 久美子**

まさかこの住宅の真下に巨大な地下空間があるとは…と驚かされる住宅である。その地下室の存在や、地上部の45回転プランや造形性にあふれた茶室（主人室とある）、おおらかなリビングルームなどの様々な部分に、生活を謳歌しようとする施主の思いをしっかりと受け止める要素が散りばめられていた。1次審査では「オリジナル地下工法」という表現に審査員一同期待したが、現地審査で説明を聞いてみると一般的な親杭横矢板のようである。また、親杭がそのまま地上部の本体鉄骨へと接続するという事前のプレゼンに対しても、一般的な埋め込み柱脚と判断することが妥当と思われた。結果として応募資料にあった「オリジナル地下工法」という記述は間違いであると判断せざるをえなかった。奨励賞とさせていただいたのはそうした理由からである。

1階奥に向う「下の路地」と、2-3階へ向う「上の路地」のある構え。成熟化した商店街の中にあって、街の新陳代謝を担うことを目指してる

KITAYON

1：設計者自らが事業主となり、「暮らし方」と「街のこれからに」働きかける

設計者が事業主になるというのはどういうことなのか。それは、建築に携わりながら培ってきた、これからの人の生き方や街への普段の想い、構想力をダイレクトに実現できることだと考えます。

2：個人の商いを支える場づくり

どこかに勤めるのではなく、職住近接で小商いをしながら身の丈で暮らす人々の拠点作り。彼らの活動舞台を実現するための個人サイズの檜舞台作りを行ないました。設計たのはアトリエ付き住宅2戸とアトリエ店舗スペース3戸。アトリエ店舗も近所に住む人が借りています。

3：2つの路地をつくり、敷地を街にひらく

敷地の奥にまで路地を引き込み、敷地内に路面区画を複数確保できるようにします。街の新しい路地となり、公共空間の賑わいに寄与すればと考えました。

4：街と接する境界面のつくり込み

路地に面した建具は特注の製作物である。共働頂いた作り手によるスチールサッシと真鍮取手。街に対する構えの整備が、入居者を引き立て、街のクオリティを上げる事にも繋がると考えました。

5：5年後にまた次の建物を。

この建物がこれから生み出すキャッシュフローにより5年～10年ほどで次の建物建設が可能な事業計画を組んでいます（融資を受けるための自己資金を作ることができます。）。その資金で同じ商店街に次の拠点を設けていきたいと思っております。

6：設計者の職能：自ら主体的に生み出す公共への貢献

この拠点作りを続けることで、その集積がやがて線となり、面となる。そのような街作りを民間である自らが行い、街を活性化していくことができればと考えています。この建物は、設計者が自ら主体的に公共空間を豊かにしていくための一歩になると考えております。

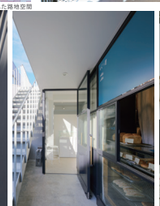
↑街の一部となることを目指した路地空間

↑路地に対して長いファサードを持つ店舗

↑開放感のあるスチール建具越しに街と内部が繋がる

↑路地の一番奥には美味しい食堂がある

↑2階へと登る、気持ち幅を広くした路地階段

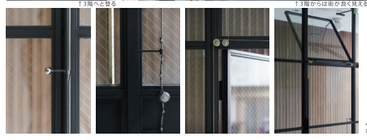

↑2階路地奥まり、パン屋とジュエリーショップ

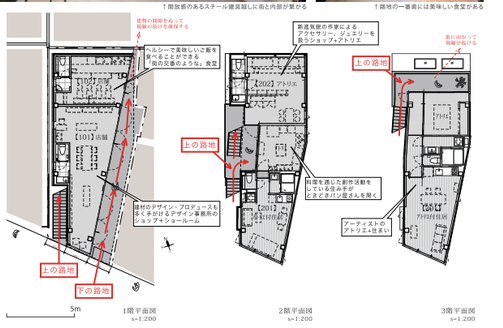
↑ジュエリーショップの奥にあるアトリエ。北側からの柔らかな光が入る

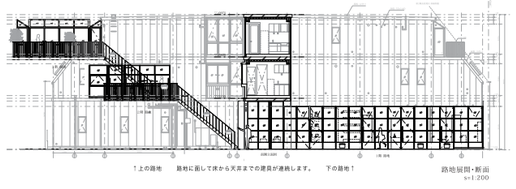
↑3階へと登る

↑3階からは街が良く見える

↑3階の土間スペースは内部にも建具が入りうる


←スチール建具の補修なら町都ディテール




↑上の路地　路地に面して床から天井までの建具が連続します。　下の路地↑
路地展開・断面 s=1:200

リビングから1階天井内をみる。
吊棚におかれた食器や本、子供のロフトスペースなど小さなスケールの空間が水平に広がっている。

階段室からロフトと子供室2をみる。
外壁小屋組部分には両面に開口を新設し、光と風を室内にとり入れる。

吊棚内からキッチンをみる。
床や天井に穴が空けられたことによってつながりが生まれ、1階と2階がダイナミックにつながる。

居室から一段あがった寝室2をみる。
天井に開いた穴から1階リビングの様子がうかがえる。
南側隣地には透明ポリカを用いて1階まで光を届ける。

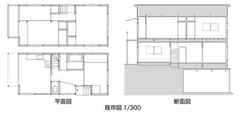
リビングの吊棚をみる。
24mmの構造用合板に5.5mmのラワン合板EPで仕上げている天井は吊棚として利用される。

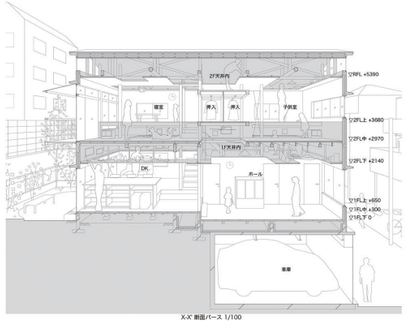
ホールからダイニングキッチンをみる。
1階天井に設けた穴から2階の様子もうかがえる。

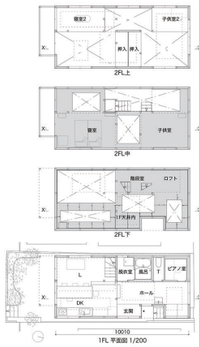
北側外観。
東西の隣家は敷地最奥ぎりぎまで建てられている。
アプローチ階段のタイル面も室内同様に白塗装。

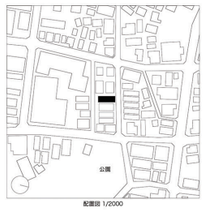
床と天井

夫婦と子供の4人家族のための木造2階建住宅のリノベーションです。両隣に住宅が建て込み、2階床によって上下の空間が分断され1階が暗い場所でした。
床と天井を上下させたり、穴を開けたりしながら、床面積を減らすことなく光を取り入れ、部屋同士のつながりのある空間をつくっています。居室は白く塗り、アトコロの空間は木の素地としました。2層だった空間がアトコロを聞くことで4層となり、2つの床レベルを6つに増やすことで色々な高さで2階建てを体験できる多様な居場所をつくっています。
これは多くの木造住宅がもつ「2階建て」という型そのものをリノベーションし、日常の中に建築を発見しようとする試みです。







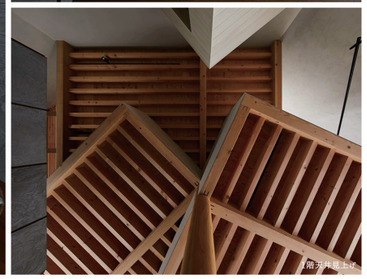


概要

所在地	東京都北区	敷地面積	78.87m2
主用途	一戸建の住宅	建築面積	45.55m2
構造	木造	延床面積	89.44m2
階数	2	竣工	2017.11
家族構成	夫婦＋子供2人		

ダイニングようラビングを見る

玄関ようリビングを見る

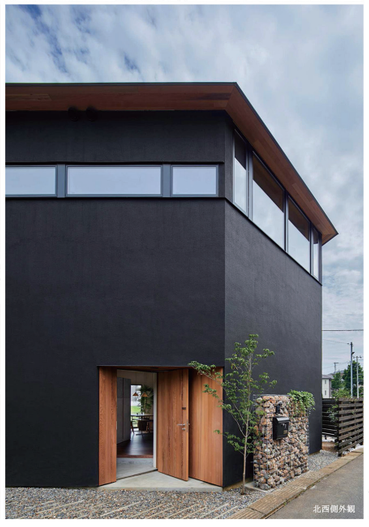

開放感を見上げ

リビングようダイニングを見る

階段

吹抜けを介して反射光が降り注ぐ

2階の開口部から差す光が、傾斜地に反射する光のように個室の壁に反射しながら1階にやわらかく降り注ぎ、そこで営なわれる生活に光の濃淡を与える。


北西側外観

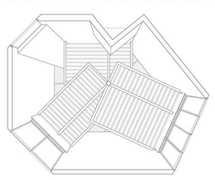
玄関

2階階段

room1内観

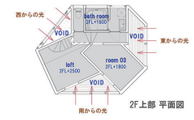
キッチン

room3内観

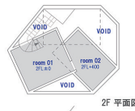


谷陰の光

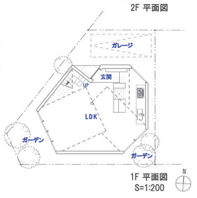
見上げると空が異様に明るかった。計画地一帯は周辺から窪んだ場所で、すり鉢状に家々が建ち並ぶ、いわゆる谷地である。ここでは朝陽が東側傾斜地の、夕陽が西側傾斜地の家陰となり光の差す時間が制御される。この谷陰に包まれた谷底から見上げる傾斜地に反射する光、谷地一帯を覆う空の明るさのコントラストが、この場所特有の光環境である。本計画は、1階を周囲と連続した谷底のようなワンルーム空間とし、その上方に覆いかぶさる個室の床レベルの変化が1階天井高さに反転して転写される。2階の開口部から差す光が、傾斜地に反射する光のように個室の壁に反射しながら1階にやわらかく降り注ぎ、そこで営なわれる生活に光の濃淡を与える。



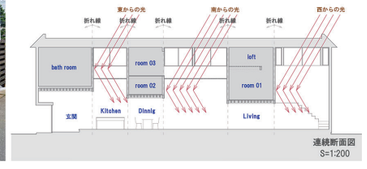
2F上部 平面図



2F 平面図



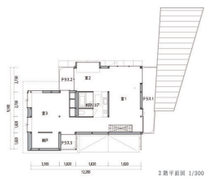
1F 平面図
S=1:200

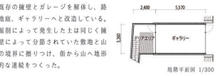


連続断面図
S=1:200

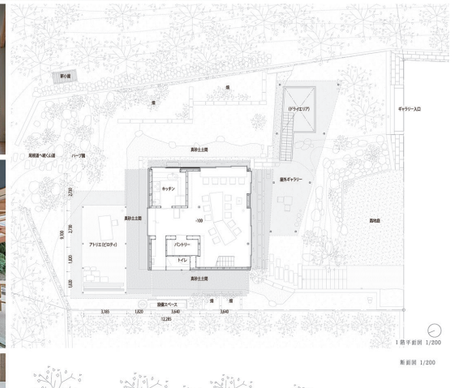
稲村の森の家

家と町との関係を解体・再構築することで、家が新しい家族像の受け皿になるではないかということを考えた。試みたことは極めてシンプルである。 1、擁壁を切り崩し、半地下の駐車場の壁をぶち抜いて、街から回遊できる前庭空間をつくった。2、前庭をまたぐようにパーゴラをかけ、前庭とパーゴラによって街と住居の間に<間>が折り重なるような中間域をつくった。3、住居の１階は、家族とこの場所に集まる友人・知人・地域の人のための溜まり場のような場所であり、ダイニングルームや食堂や集会所のように機能する。4、住居を取り巻くように複数の庭がつくられる。森を耕すための作業場であり、野菜や果樹を育てる菜園。5、あらゆる空間はできるだけ意図を持ちすぎないように設計され、ただし能動を引き出すためのきっかけは埋め込む。6、庭 / 庭をながめる座 / という外部との関係からつくられる空間と、集まって話す / 食事をする / 作業をするというような行為からつくられる空間が折り重なり、多数の人やグループが思い思いに時間をすごせるようなおおらかな環境を目指している。

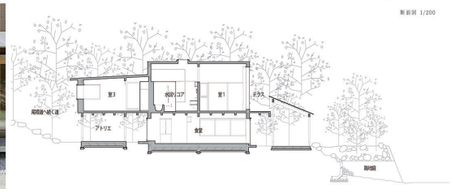




既存の擁壁とガレージを解体し、路地庭、ギャラリーへと改造している。解剖によって発生した土は同じく擁壁によって分節されていた敷地と出の境界に散りつけ、街から由へ地形的な連続をつくった。



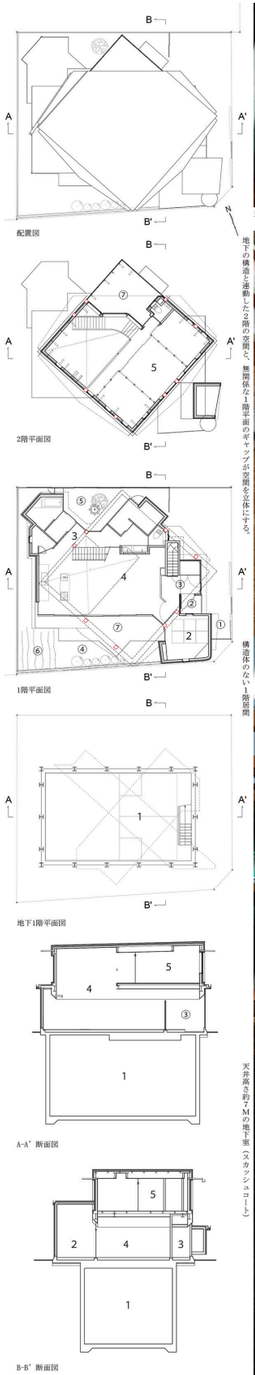
断面図 1/200



「酒井邸」

全ては、地下室から始まった。「地下でスカッシュがしたい」という施主の特異な希望を叶えるためには、「天井高さ約7Mの地下室が必要であった。ところが、従来の地下工法では敷地内に余堀が納まらず、不可能な要望であった。

そこで、垂直掘削を可能とするオリジナル地下工法を開発した。親杭を本構造の一部として、型枠量を半減、余堀・切梁・支保工を一切不要とし、大幅なコスト削減も実現した。その杭を延長して8本のGコラムのみで地上部を浮かし、暮らしの中で住み手が自由に生活空間を変えられる構造とした。面積の限られた都心において、大量生産の道以外にも〈突き抜けた私性〉が公共の利益（施工的・経済的合理性）を生むことを意図した。



主人室（写真中央は床の間）

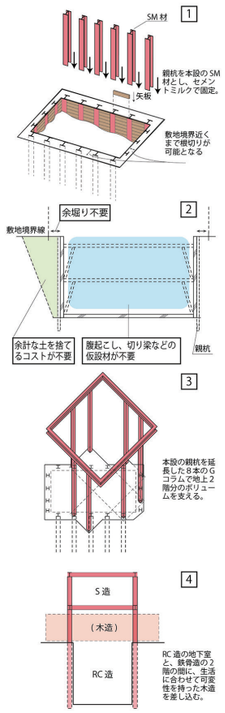
寝室から居間を見る

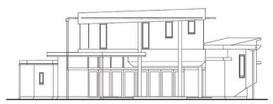
南庭越しにGコラムで持ち上げられた2階部を見る（写真右手は街区の角に配された主人室）

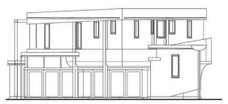
玄関アプローチ

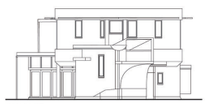
オリジナル地下工法による空間の体験・組み立て

垂直な根切りと同時に矢板を嵌めていく




南西立面図


南立面図


南東立面図

東立面図

撮影／西川茂（主段外観、施行中写真以外）

住宅建築賞受賞者プロフィール

KITAYON

寶神 尚史
Hisashi Houjin

1975年：神奈川県生まれ
1997年：明治大学理工学部建築学科卒業
1999年：明治大学大学院修士課程修了
1999～2005年：青木淳建築計画事務所
2005年：日吉坂事務所設立
現在、京都造形芸術大学非常勤講師、明星大学非常勤講師、共立女子大学非常勤講師、工学院大学非常勤講師、日本女子大学非常勤講師

太田 温子
Atsuko Ota

1982年：静岡県生まれ
2006年：武蔵工業大学（現：東京都市大学）工学部建築学科卒業
2008年：武蔵工業大学（現：東京都市大学）大学院修士課程修了
2008～2010年：ハウスメーカー勤務
2010年：日吉坂事務所

床と天井

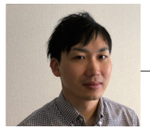
河内 一泰
Kazuyasu Kochi

1973年：千葉県生まれ
1998年：東京藝術大学美術学部建築学科卒業
2000年：東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了
2000～2003年：難波和彦＋界工作舎勤務
2003年：河内建築設計事務所設立
2008～2010年：京都精華大学非常勤講師
2010～2015年：日本大学非常勤講師
2013～2015年：東京藝術大学非常勤講師
現在、芝浦工業大学、東海大学、武蔵野美術大学、千葉工業大学非常勤講師

谷陰の光

加藤 大作
Daisaku Kato

1979年：神奈川県生まれ
2003年：東京理科大学工学部第一部建築学科卒業
2004年～：MDS一級建築士事務所
2015年：UND一級建築士事務所設立



清水 純一
Junichi Shimizu

1982年：宮崎県生まれ
2006年：日本大学生産工学部建築工学科卒業
2006～2008年：FORM一級建築士事務所
2008年～：MDS一級建築士事務所
2016年～：UND一級建築士事務所 参画

稲村の森の家

藤原 徹平
Teppei Fujiwara

1975年：神奈川県生まれ
2000年：横浜国立大学大学院修了
2001～2012年：隈研吾建築都市設計事務所
2009年～：フジワラテッペイアーキテクツラボ代表
2010年～：NPO法人ドリフターズインターナショナル理事
2012年～：横浜国立大学大学院Y-GSA准教授

酒井邸

渡邊 大志
Taishi Watanabe

1980年：神奈川県生まれ
2003年：早稲田大学理工学部建築学科卒業
2005年：早稲田大学理工学術院建築学専攻修了
2005～2013年：石山修武研究室個人助手
2007～2009年：早稲田大学非常勤講師
2009～2012年：早稲田大学助教
2012年：東京大学大学院工学系研究科博士課程修了（伊藤毅研究室）、博士（工学）
2012～2015年：早稲田大学専任講師
2015年～：渡邊大志研究室一級建築士事務所
2016年～：早稲田大学理工学術院建築学専攻准教授
港区景観審議会委員、世田谷まちなか観光交流協会委員
主著に、『東京臨海論ー海からみた都市構造史ー』（東京大学出版会、2017）など